U-35委員会企画
talk baton 21　活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

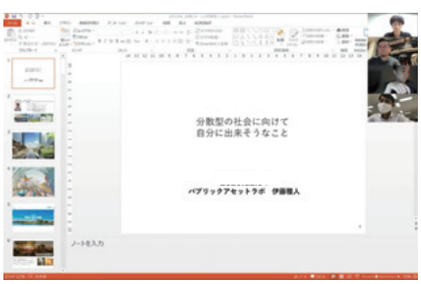
建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会の過去の活動は、
こちらのHPからご覧いただけます

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

https://www.facebook.com/U35.aaj



コロナ禍のためオンラインにて開催された

talk baton 21
「建築とパブリック」

ゲスト
日建設計
パブリックアセットラボ
ラボリーダー
伊藤雅人氏

2008年日建設計入社。ハードとソフト両面でパブリックスペースをデザインする事業に取り組んでいる。

今回のトークバトンは「建築とパブリック」をテーマに、我々が普段何気なく利用しているパブリックスペースがどのようにして整備、運用されているのかを深く知るトークバトンとなった。計画・企画段階から運営に至るまで、ハードとソフトの両面でパブリックスペースをトータルにデザインする事業に日ごろ取り組んでいる伊藤氏にお話を伺った。

■みんな外で集まれる場所を求めている!?

まず最初にご紹介いただいたのは、狛江で取り組んでいる多摩川河川敷のポテンシャルを生かすために始まった多摩川リバーサイドフェスティバル「タマリバ」の事例だ。

（HPリンク先：https://www.tamariba.info/）

伊藤「地域の人に愛されていた河川敷が、あるときからゴミ問題が深刻になってしまいBBQ禁止としたところ、人が極端に来なくなってしまった。これではせっかくのオープンで気持ちのいい場所がもったいない、ということでここを思い切り使ってやろうというイベントを行ったところ、３年後には延べ１万人来るようなイベントに成長しました。やっぱり場所をちゃんとマネジメントして、しっかり活かして使ってみるとこれだけの人が来る、みんな外の場所を求めているのだということが実感できる経験でした。」

さらに、コロナ禍の影響もあり都市は集中型から分散型へと変化している。公共空間の利用の仕方についても変換期に入っていると伊藤氏は考えている。

タマリバの紹介

伊藤「少し前までは都市部に集中して集まってきて仕事をしていましたが、今は家の近くで仕事もできれば生活もできる。家の近くにどういうパブリックな場所があって、そこがどういうふうに使われているかということが、QOLに大きく影響する。分散型モデルがだんだん都市で進んでく過程において、郊外の公共空間をどのように活用するか考えていくことが課題だと考えています。」

■日本の公園の課題

続いてご紹介いただいたのが、Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2018 で取り組まれた「PARK PACK」という活動だ。（HPリンク先：https://ultrapublic.jp/parkpack/）

伊藤「日本の公園は、有効利用できていないとよくいわれています。整備にも維持管理にも運営にもお金がまわせてないから寂しい公共空間になってしまっていることが多いんです。実際現状の公園の運営はどうなっているかというと、実は都市公園法ではほとんど禁止事項がないのに、クレームが出るから、危険だから、いざという時に責任が取れないからといった、管理者・運営者側の都合で禁止事項が多くなっています。」

公園のデザインだけでなく運営にも参入することになった伊藤氏が手掛けた取り組みの一つが「PARK PACK」である。

伊藤「Tokyo Midtown の芝生広場も公共空地で、禁止事項がいくつかあるのですが、17日間、イベントを行っている間は禁止事項を取っ払ってアクティビティを生み出すための公園運営ができないかという試みをしました。DESIGN TOUCH（※１）って大体アートを見て、触れて帰るという、あまり滞在していくようなイベントではないんですが、我々は未

PARK PACKの紹介

来の公園というコンセプトで、この場所に張り付いて運営を行うことで来場者の滞在時間を大幅に増やすことができました。」
公園でやりたいことは人によって全然違う。多様なニーズに応えるため、一例として今回はモジュール（プチプチの緩衝材の固めのもの）をいろんな形に繋ぎ合わせるなどして、椅子・テーブルからオブジェまでさまざまなものに変化するツールをデザインし提供したという。
伊藤「面白いなと思ったのが、来場者とのコミュニケーションの結果として、現地でどんどんライブやワークショップが発生したんです。これはまさに、公園がやりたいけど公園ができていないことだと思いました。」
通常は、運営者が公園にいるわけではないことや、禁止事項が多いことで公園が発信の場や新しい展開の場にできないのが現状である。運営サイドが現地にいることで、状況に合わせて提供できるコンテンツを発信したり、相互にコミュニケーションを取ったりして、来場者自身がやりたいこと・発信したいことが実現できる様子に触れ、これからの公園の可能性を見たと言う。
（※１：2007年から開催されている“デザインを五感で楽しむ”をコンセプトに掲げるデザインの祭典）

■公園が面白くなるとエリアが活性化する

伊藤氏が現在、公園のデザインから運営にまで携わっているプロジェクトが渋谷区の北谷公園だ。渋谷駅から徒歩10分ほどにあり、渋谷公会堂にもほど近く、周辺はセレクトショップなどの路面店が多く集まっているエリアにある公園である。（HPリンク先：https://shibuya-kitaya-park.tokyo/）
伊藤「半分駐輪場・バイク駐車場で、残りの半分が喫煙所みたいになっている、公園としては有効利用できていない公園でした。
ここを渋谷区としても何とかしたいという話があり、Park-PFIの公募があったため、東急

北谷公園（©フォワードストローク）

さんを統括企業とするコンソーシアムで提案しました。」
Park-PFI制度（公募設置管理制度）とは、民間事業者（カフェ等）に公園で収益事業（カフェ等）を行わせることで、公園整備における行政負担を減らすことを目的とした制度である。渋谷区は、イニシャル面では通常より軽減された費用で公園の整備が出来、ランニング面でも収益施設の土地使用料が民間から入るため、実質出し入れ無しで高質な維持管理・運営が出来るというメリットがあり、一方の民間事業者は、収益施設だけでなく公園部分へもその収益も充当して整備を行う見返りに、事業期間や建蔽率の緩和を受けることができる。
伊藤「収益性に偏りすぎると空間の質が低くなったり、公共性が損なわれる等の課題があるため、北谷公園では収益性は確保しつつもエリアマネジメント、つまりいかに地域に貢献する公園ができるかというのがプロジェクトの肝として考え、設計と運営の一体提案を行いました。」
伊藤「公園自体の設計に関して言えば、収益性を確保するために南側の場所はフラットな整形のイベントスペースを設けました。さらにそこに屋根をかけて、一時的にも部分的にも雨がしのげる場所を作り、イベントスペースとしての使い勝手を上げています。それとはまた別のステージを設けていて、その横をステップ広場として階段の空間にしているのですが、ただの階段というよりは滞留空間としてデザインしています。ブルーボトルコーヒーのカフェが入った建物の前にもテラス的な空間があり、結構細かく広場の性格付けをしていて、この公園の中に実は小さな広場が６つぐらいあるという提案をしました。まずもともと高低差がある土地で、中に入りづらい公園だったのですが、道路からのレベルを合わせて出入口を設けることでパッと開いた街との連続性を担保し、それにより公園の中での高低差がよりメリハリが効くので、様々な性格の広場を共存させるという趣旨でやりました。これも“公園を地域の多様な活動の場とする”というコンセプトからきています。」

■地域の価値を上げるための取り組み

地域や多様な人を巻き込んで活動するために、近くの桑沢デザイン研究所の学内授業の一環として公園のロゴコンペを実施し実際に掲示したり、アンテナショップの展開をしたりなど、昨年春のオープン以来自主事業として様々に取り組んでいるという。
伊藤「今考えているのは、地域の事業者が参画できるような取り組みをやろうと考えています。この辺りはアパレルのお店が集積しているんですけれども、昔は神南のセレクトショップで買い物することがステータスだったり、そこでしか売っていないというのがあった。でもだんだん駅前で出店しているような店舗と差別化されなくなってきて、結果としてこういうエリアで路面店を巡って買い物するといったことが減ってきたんですね。神南というエリアもちょっと元気がない、かつコロナでどんどんセレクトショップも減ってきている、というエリア的な課題があるので、この公園でイベントを行うことによって、周辺のお店を知ってもらって日常的に周辺のお店へ行ってもらえるようになるとか、ここのマルシェと同時開催でエリアの路面店でも何かブースを出してもらってイベントを行ってもらうなどして、地域に如何に人を戻していくか、地域との連携活動を今後の挑戦としていこうとしているところです。」これからの公園はデザインするだけではなく、コミュニティを生み出していく運営が重要であり、出来上がった後の管理や運営をしっかりと行うことで新たな価値を作り出す可能性を秘めている。（文責：赤木）

talk baton 21 を終えて

今回はコロナ禍のためtalk batonをオンラインにて開催した。そのコロナの影響もあって外部のパブリックな空間の価値が見直されていること。また、パブリックスペースの価値を上げることがその周辺エリアを活性化し、その活動が地域の価値を上げる取り組みへとつながるような好循環を生み出すお話など大変興味深い示唆を得る会になった。

対　談　日：2021.09
場　　所：オンライン
モデレーター：赤木建一（日建設計）